

特集 優良品種による果樹産地の活性化

1 優良品種による果樹産地の活性化

本県では、恵まれた自然条件を生かして多種類の果樹が栽培されている。一方、小規模な経営で傾斜地園が多く、機械化や省力化栽培の導入が難しいこと、栽培者が高齢化し改植や新植が進まず老木化園比率が高くなるなどの課題を抱えている。

直売や宅配をはじめ観光農園やオーナー制果樹園などにより果樹を介した消費者や都市との交流が進む昨今、消費者ニーズに対応した優良品種の選定は地域農業活性化の牽引役として重要な役割を果たしている。今回は県内各地域における特産果樹に関する新品種、優良品種に対する取組について紹介する。

イチジクは都市近郊の立地条件を生かして阪神・播磨地域を中心に「榊井ドーフィン」が栽培されている。この品種は寒さに弱いため、内陸部でも栽培できる耐寒性のある新しいイチジクの育成に取り組んでいる。

但馬地域は「二十世紀」ナシの主産地であるが、近年、黒斑病耐病性品種「おさゴールド」が育成された。この特性を生かして通常2回行う袋掛けを1回にする省力栽培について紹介する。

ブドウは播磨地域を中心に栽培されており、観光農園や直売所を通して販売されることが多く、直接消費者の嗜好を反映させることができる。大産地のように市場流通を前提にした適品種の選定ではなく、観光直売に適する品種といった観点から選定した優良品種について紹介する。

クリは丹波地域、北摂地域を主体に栽培されており、それぞれ「丹波栗」「北摂栗」としてブランド化を進めてきている。今回は「北摂栗」のブランド力強化を目指した「銀寄」品種の分別出荷の取組について紹介する。

小山 佳彦 (農業技セ・園芸部)
(問い合わせ先 電話：0790-47-2424)

2 イチジクの品種育成

1 はじめに

県内のイチジクの栽培品種は、ほとんど「榊井ドーフィン」である。本品種は豊産性であるが、寒さに弱く、県内の栽培適地に限られる。そこで、当センターでは、品種の多様化と栽培地域の拡大を目指し、イチジクの品種づくりに取り組んでいる。

2 研究の方法・内容

1983年に、「榊井ドーフィン」を種子親(母親)とし、花粉を持つイチジク、「Caprifig6085」を交配した中から、大果で花粉を持つCapri Type 1 個体(仮称MC-1)と、果実が採れるCommon Type 1 個体(仮称MC-2)を選抜した。1999年、「蓬萊柿」を種子親に、「MC-1」花粉を交配し、その実生を丹波市のほ場で養成後、2003年「ビオレ・ドーフィン」に高接ぎし、着果を促進させ果実等を検討した。その結果、

①「MC-1」を花粉親(父親)とする「蓬萊柿」のF1個体は内陸部の丹波市でも凍害を受けなかった。

②結実は、「H-MC3」が最も良好で豊産性であった。

③「H-MC1」は、他系統より大果であり、果実品質も良いが、結実が少なく樹勢も弱かった。

④「H-MC1、3」は濃い紫色に着色したが、「H-MC5」は独特のピンク色に着色し、食味良好であった。

⑤食味は、各系統とも「榊井ドーフィン」と同等又はそれ以上であった。

⑥「MC-2」は、果皮が黄色い。果実は小玉であるが食味良好で、裂果が少なく、日持ちも良かった。

3 今後の方針

さらに、果実特性、生育特性を明らかにし、寒さに強い良食味品種の選抜を行う。また、直売や業務用など新たな需要を開拓できる品種も選抜し登録普及に移す。

真野 隆司 (農業技セ・園芸部)
(問い合わせ先 電話：0790-47-2424)

表 育成系統の果実データ(2006)

系統名	果重g	Brix	果形	果皮色	系統の特徴
H-MC1	140.0	16.8	卵形	紫黒色	きわめて大果、着色濃い、結実性不良、樹勢弱
H-MC3	75.7	16.3	短卵形	紫黒色	結実良好、着色濃い、樹勢強
H-MC5	64.5	18.3	短卵形	赤紫色	独特の色調、良食味、樹勢やや強
MC-2	36.5	17.1	卵形	黄色	小玉、黄色の果皮、良食味、裂果少、直立性で樹勢強
M	71.8	16.4	長卵形	紫褐色	大果、結実良好で豊産性、樹勢中、耐寒性やや弱

系統名のアルファベットはH:「蓬萊柿」、M:「榊井ドーフィン」、C:「Caprifig6085」の略